早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨
3643-2

論文　概要

自己の構築と「語り」の変遷

片　桐　雅　隆

要約

（1） Ⅰ部、Ⅱ部、Ⅲ部の構成

Ⅰ部では、自己を理論的にどのように見るかをシンボリック相互行為論に根差す構築主義の視点から明らかにしようとし、Ⅱ部ではその展開として、自己を構築する素材としての自己の「語り」の歴史的な変遷を、日本とアメリカの戦後社会の中にたどろうとした。そして、Ⅲ部は、Ⅰ部とⅡ部での残された問題についての補足と、特にⅠ部とⅡ部の関連づけを含めて、全体的なまとめを意図したものである。

（2） Ⅰ部での自己の構築主義の理論的なまとめ

Ⅰ部の各章の要約をする前に、Ⅰ部において示された自己の構築という理論的な視点を、総合的にまとめると以下のようになる。

構築主義的な自己論の出発点は、自己を他者との関連や相互行為との関連の中で検討することにある。そして、そのことを考えるキーワードは、役割である。ここで用いられる役割は、従来常識的に用いられてきた規範や義務などのセットと同義ではなく、自己や他者をどのように見るかという視座（パースペクティブ）であり、それは自他関係の認知地図と定義される。この認知地図は、上司や部下の役割、親と子供の役割などのように地位に付随する自己と他者の関係だけではなく、男と女、大人と子供（あるいは若者）、日本人と外国人などの自他関係一般を意味するものとしても用いられる。このように、役割は、自己と他者をどのように定義するかという認知地図であり、規範や義務としての役割と区別して、役割（カテゴリー）と言い換えられる。

そのような役割（カテゴリー）は、単なる認知な地図にとどまらず、同時に、相互行為を構築する素材であると考えられる。特定の場面で、自分をある役割（カテゴリー）の担い手として呈示することは、自分がその役割の担い手であることを自他に示すことに限られず、同時に他者に対して、自分をその役割の担い手として認めさせること、他者に対してその役割に対応して振る舞わせることを意味している。一般に、自己を特定の役割カテゴリーの担い手として呈示すること（＝自己呈示）は、他者が特定の役割カテゴリーの担い手として振る舞うこと（＝他者呈示）を不可避的に伴う。そのような自己呈示と他者呈示の連動の中で、相互行為が構築されると考えられる。

このように、役割（カテゴリー）は単に認知的なものではなく、相互行為を構築する働きをもつが、次に考えられるべき点は、相互行為の構築が、あらかじめ定められた役割（カテゴリー）によって定式化されているのではなく、役割の具体的な使用に依存しているという点である。それは、特定の役割（カテゴリー）の呈示が、他者への強制や他者による拒否を伴う場合もあり（役割の非対称性や対立の問題）、またルーティン化された役割（カテゴリー）の相互の呈示も全く同じように再現されているとは限らないからである。役割（カテゴリー）の使用のあり方は、その意味で具体的な特定場面に依存している。特定場面において他者の行動を予期し、自己の行動を調整し、そのことによって役割（カテゴリー）を用いて自他をふさわしく定義し呈示しうることが、「役割取得」の意味するところであったが、一方、役割取得の１つの側面として、役割（カテゴリー）の使用が相互行為を「形成」し、その過程が偶発的であり、相互の自己呈示、他者呈示のせめぎあいを伴うことが、特に「役割形成」という用語によって示された。

また、役割（カテゴリー）は、地位に付随した自他関係の認知地図ではあるが、感情や

動機の語彙、あるいは物語などと関連し、それらと重なるものとして拡大して解釈された。役割（カテゴリー）は、それぞれのカテゴリーの担い手がどのような特徴をもち、どのように振る舞うべきかを規定するが、そのことは、必然的に自己の感情を説明し、自己にどのような動機を付与すべきかの語彙を、役割（カテゴリー）が含むことを意味している。また一方で、役割（カテゴリー）は、大人や子供というカテゴリーに典型的に見られるように、そのカテゴリーの担い手を、時間軸の中に位置づけるものである。例えば、大人がどのような過去をもち、またどのような未来をもつかは、子供とは異なってそれぞれの役割（カテゴリー）において定義されているように、役割（カテゴリー）は物語性をもちうるものであり、物語の１つと位置づけることができる。

このようなことをふまえて、相互に関連し、重複する感情や動機の語彙、役割（カテゴリー）、物語などの自己を位置づけ、語るための語彙の総体が自己の「語り」と定義される。シンボリック相互行為論は、自己のみではなく、一般に自然的、社会的な対象が、言語に代表される記号、とくに記号内容としてのシンボルによって構築されるという視点に立つが、本書での理論的視点は、シンボル一般ではなく、シンボルの１つとしての自己の「語り」に注目することによって、自己の構築のあり方を検討することにある。

（３）１部の各章の要約

１章の「シンボリック相互行為論をめぐる２つの争点－ミクロ・マクロ問題と自己の構築主義」では、上記でまとめられたような自己の構築主義的な視点の土台となるシンボリック相互行為論の基本的な考え方を、ミクロ・マクロ論争におけるシンボリック相互行為論の位置づけや、ポストモダン的な自己論と対比、という学説史的な観点から総括的に示すことが課題とされる。

ミクロ・マクロ論争の中でのシンボリック相互行為論の位置づけにおいては、従来シンボリック相互行為論が「個人の主体性」に焦点を当てるミクロな社会学であるという見方に対して、それが「個人主義的な」理論ではなく、「自由な試行的な行為をとおして、社会化された個人が社会を再－創造するという見方」に立つミクロとマクロを統合する視点をもっていること、また、ポストモダン的な自己論との関連においては、シンボリック相互行為論が主体性を単純に強調する理論ではなく、自己をシンボルによって構築されるものと考える点で、ポストモダン的な潮流の中に位置づけられる自己の構築主義の視点とも対応することが指摘された。

２章の「シンボルによる自己の構築」では、１章での総括的な指摘を受けて、シンボリック相互行為論の自己論が単純な主体性を強調する理論でないこと、それが、自己をシンボルによる構築物とする理論的立場に立つことをあらためて検討した。

そこでは、特に役割とは何かをめぐって従来の役割論とは異なる、シンボリック相互行為論的な役割論、あるいは本書での独自な視点に基づく役割の規定の展開が意図されている。役割は、規範や義務の体系と見られるのではなく、自他の関係をどのように見るかの認知地図であり、規範としての役割から区別される役割（カテゴリー）であること、さらに、役割（カテゴリー）には、感情や動機の語彙の要素や物語の要素が含まれることが指摘される。そして、ここでのこのような役割（カテゴリー）の規定は、本書のキーワードである自己の「語り」の定義の根拠となっている。

３章の「相互行為と自己－構築主義的な役割理論の視点から」は、自己のシンボルによる構築が相互行為の中で達成されるという論点にあらためて注目し、その論点を詳論しよ

うとしたものである。

そのような観点から、３章では、役割（カテゴリー）は、単なる認知地図ではなく、それは同時に相互行為を構築していく素材であること、役割（カテゴリー）の具体的な場面での使用はあらかじめ定式化されたものではなく、その場の偶発性に依存していること、さらにその偶発性は、役割の使用における非対称性や対立に根ざしていることなどが検討される。そして、そのような相互行為のメカニズムを考えるための概念として、「役割セイリアンス」という概念が注目された。役割セイリアンスは、さまざまな選択の可能性の中で、人がどのような特定の役割（カテゴリー）をもつのか、また特定場面でどのような役割（カテゴリー）が支配的なものとして用いられるかを問う概念であり、３章では、その視点が相互行為における役割の使用の非対称性や対立を考える土台となっている。

４章の「リアルセルフ論再考－自己の『語り』の知識社会学へ向けて」では、感情の社会学の知見に依拠しつつ、自己を構築する語彙の総体としての自己の「語り」の中でも、特に感情や動機の語彙にあらためて注目し、それがやはり単なる語彙ではなく、相互行為を規範的なものとして構築していく素材であること、また同時に、それが歴史的に多様であり、変遷するものであることを示そうとした。

その議論の出発点は、ターナーの衝動的リアルセルフをどのように解釈するかに置かれている。つまり、衝動的リアルセルフは、従来、衝動への抑制の解除、衝動の露出化と解されてきたが、ここでは自己の構築主義的な立場から、衝動的リアルセルフの成立は自己を語る語彙として衝動が用いられるようになってきたことを意味すると考えられた。したがって、制度的リアルセルフから衝動的リアルセルフへの移行は、感情や動機の語彙の歴史的な変遷の事例として位置づけられる。このような感情や動機の語彙の変遷をとおして、社会の変動を見ようとする視点は、ミルズによって「動機の語彙の知識社会学」として提出されている。Ⅱ部では、さらにその語彙を自己の「語り」一般に拡大し、自己の「語り」の変遷をとおして社会変動のあり方を問うことが課題とされるが、その視点は「自己の『語り』の知識社会学」として４章で提出されている。

（４）Ⅱ部の各章の要約

Ⅱ部においては、日本における人間類型論や人生論、アメリカにおける人間類型論としての自己論を取り上げ、それらの人間類型が、日常的な人々の１次的な構築物を土台とした科学やジャーナリズムによる２次的な構築物であるとともに、人々がそれを用いることによって相互行為を構築する素材と位置づけられることをふまえて、それらの人間類型の展開をとおして、自己の語りがどのように変遷してきたかを展望した。

５章の「日本における自己の『語り』の変遷－人間類型の変遷をとおして」においては、市民、新中間大衆、カプセル人間、新人類などの人間類型を取り上げた。

まず第１に、６０年代ころの市民が、公的領域や、結社、国家、良心（超自我）などを他者とすることによって自己を位置づける人間類型として語られたこと、欲望自然主義に根差す大衆や私民と対比された人間類型であったことを指摘した。それに対して、欲望自然主義をより肯定的に位置づける人間類型として、新中間大衆やカプセル人間という人間類型が７０年代を中心に登場する。とくに、カプセル人間は、教義やイデオロギー、集合意識などの影響力が失われ、私生活中心主義に立ち、全面的に欲望自然主義を肯定する人間類型として描かれた。また、８０年代を中心として語られた新人類は、欲望の自然主義ではなく、商品を自己を位置づけるツールとして用いる人間類型であった。

これらの人間類型の変遷に見いだされる傾向は、自己を位置づけるための一般的な他者が縮小し、それに代わって商品や欲望、あるいは自己そのものが自己の語りとして登場してきたことに求められる。そして、９０年代の自己の語りの傾向として、新人類やオタク的傾向の続きとしての団塊ジュニアの類型や、心理学的な用語を自己を語る語彙として用いる傾向と、一方での、このような他者の縮小の傾向に対する、市民の語りの復権などのさまざまな共同的な自己の語りの復権を求める動きのあることが指摘された。

６章の「人生論における『語り』変遷－武者小路実篤から中野好次まで」では、日本の戦後社会における人生論の中に自己を語る語彙の変遷を見ようとした。

まずはじめに、６０年ころまでの代表的な人生論として武者小路実篤の人生論を取り上げ、その特徴を、「社会や国家などの他者のための仕事」、「仕事における禁欲の重要さ」、「明日のための仕事」という３つの仕事観に求めた。また、大塚久雄など武者小路の同時代のいくつかの人生論を取り上げる中で、それらの人生論の傾向が、国家のためや社会のために生きることを強調する点にあることを指摘した。

これらの人生論の隆盛な時代に対して、今日は人生論の成立しない時代だと言われているが、人生論という名前はついていないが、どのように生きるかというテーマをかかえた近年のさまざまな著書を展望することの中で、今日でも人生論は廃れてはおらず、むしろ拡大し、拡散していることが指摘された。そして、五木寛之の人生論などに典型的に見られるそれらの人生論が、社会のために生きるのではなく、自分のために生きること、あるいは自分自身に生きる根拠を求めることを薦める傾向にあることが指摘された。

６章で示されたこのような人生論における自己の語りの変遷の特徴も、５章での人間類型における自己の語りの変遷と同様に、他者の縮小として規定できるが、一方で今日の人生論の動きの中には、中野孝次の人生論におけるような共同的な自己の語り復活の傾向も見いだされた。そして、日本におけるこのような自己の語りの変遷のあり方は、アメリカにおける人間類型としての自己論の変遷においても当てはまるものである。

７章の「アメリカにおける自己の『語り』の変遷－自己論の変遷を中心として」では、アメリカにおける同様の傾向を示す人間類型として、リースマンの他者指向、ターナーの衝動的リアルセルフ、バーガーらの私化する自己、ラッシュらのナルシシズムなどの自己論を取り上げた。他者指向は、それが「個々の人間関係をこえてより抽象的な社会という他者を前にして自己を位置づける」内部指向という人間類型に対して、そのような他者を欠く人間類型として規定され、衝動的リアルセルフは、社会的な倫理や規範に基づいて自己をコントロールする人間類型としての制度的リアルセルフに対して、自己の欲求や感性に忠実な人間類型として描かれた。そして、私化する自己は、「包括的で多くの人々によって共有された自己を位置づけ、語るための語彙を欠き（＝自己の未確定性、細分化）、その語彙をあくまで個人を核として構築しなくてはならない（＝個人中心性）」などの特徴をもつ自己であり、ナルシシズム的な自己は、自己を規制し枠づける強固な他者を欠くために、自己中心的で、全能感をもった自己として特徴づけられた。

他者指向、衝動的リアルセルフ、私化する自己、ナルシシズムという流れに見られる自己の語りの変遷は、日本における自己の語りの変遷と同じように、他者の縮小として特徴づけることができるが、日本での傾向と同じように、その一方で共同的な自己の語りを求める自己論の動きのあることが指摘された。ナルシシズム的な自己論も、その反面で自己中心的な自己を批判し共同的な他者を求めていたが、共同的な他者を求める動きは、ベラ

一らの記憶の共同体の復権の主張に見られるコミュニタリアンの自己論の中により典型的に見ることができた。

このように、Ⅱ部の５章、６章、７章に見られた日本やアメリカの戦後社会の自己の語りに共通する傾向は、国家や社会などの一般的な他者を前にして自己を位置づけるという傾向から、衝動的リアルセルフや欲望自然主義に見られるような衝動や欲望を自己を語る語彙とする傾向や、自己そのものを自己を根拠づける傾向への変遷の中に求めることができ、そのことは一般に自己の語りの私化と表現されるが、一方で、８０年代以降に見られる共同的な自己の語りの復権の動きも指摘された。その典型的な動きは、ベラーやマッキンタイアに代表されるような物語や歴史の復権の今日的な動きに見られ、同様の傾向は、日本における市民の語りの再燃や、６章であつかった人生論における中野に代表されるような共同性を求める「保守派の人生論」の動きの中に探ることができた。

（５）Ⅲ部の主旨と各章の要約

Ⅲ部では、Ⅰ部とⅡ部の議論での残された課題を補足することや、Ⅰ部とⅡ部の議論をまとめ両者の関連づけをすることが課題とされた。

８章は、主に９０年代に展開されたアメリカにおけるポストモダン的な自己論と、７章で検討された８０年代までのアメリカの自己論の流れとの関連づけを考えるとともに、ポストモダン的な自己論自体のもつ理論的な問題点を、シンボリック相互行為論に根差す構築主義点な視点から批判的に検討することを課題としている。

ポストモダン的な自己論の理論的な問題点としては、自己の主体性の否定や自己の断片性や浮遊性という規定が取り上げられ検討された。そこでは、ポストモダン的な自己論によって否定された自己の主体性は、それが自己の動因としてではなく自己への反省性として考えられる限り評価されること、また、自己の断片性や浮遊性も、それが、相互行為における非対称性や対立という考え方によって補われるべき点が指摘された。

また、７章で示されたアメリカの自己論の流れとの関連づけという点では、ポストモダン的な自己論は、衝動的リアルセルフ論などの自己論をモダンの自己の語りを残すものとして、自らの自己論と区別しているが、自己を位置づける安定した枠組の存在を否定し、自己の断片性や浮遊性を強調した点では、衝動的リアルセルフや私化した自己、ナルシシズム的な自己論の延長線上に位置づけられることが指摘された。

終章では、結語として２つの点を検討した。１つは、Ⅰ部で指摘した自己の構築をめぐる基礎理論を確認し、そこでの視点と、Ⅱ部で検討した、自己の語りの歴史的な変遷との関連をあらためて指摘することであり、もう１つの点は、自己の語りの歴史的な変遷を、私化現象との関連であらためて位置づけることによって整理をし、さらに今日的な自己の語りの動向を展望することである。

Ⅰ部では、自己が自己の語りに代表されるようなシンボルによって構築されること、そして同時にそのようなシンボルによる自己の構築が相互行為において動態的に行われることが強調されたが、Ⅱ部での自己の語りの変遷においては、シンボルとしての自己の語りそのものに注目し、その歴史的変遷に注目した。終章の１節では、自己の語りが、衝動的リアルセルフと制度的リアルセルフの対比などに見られるように、自他を区分し、その枠組を相互に付与することによって相互行為を構築していく根拠となり、また同時に相互の付与には非対称性や対立が伴うという点で、それが、単なるシンボルではなく、相互行為を動態的に構築していく素材であることを示すことによって、Ⅰ部の視点とⅡ部の視点と

の結び付きをあらためて指摘した。また、２節では、Ⅱ部での、自己の語りの、日本とアメリカの戦後社会における変遷を私化現象との関連であらためてまとめるとともに、今日的な自己の語りの動向についても補足して検討した。